

たまゆらけ恋ゝ堕姫の淫虐おためしゝ

体験版

宇髓の掌が自分の身体を何度も撫で回している。その度に全身性感帯になった炭治郎の身体は淫熱で昂ぶり、口から熱い吐息がもれてしまう。

宇髓に撫で回される感触が心地よく、炭治郎は全身が発情してゆくのを感じていた。

「凄いな・・・こんな手触りの身体は初めてだぜ。いつまでも触っていてえなあ。これを淫鬼に使うんだから、もったいねえ・・・」

宇髓は炭治郎の額に鼻頭をあて、胸いっぱい空気を吸う。

「ああ、良い匂いだ・・・たまんねー!」

そう言っただけの炭治郎の体中の香りを嗅ぎ始める。

「や、やめて、ください・・・恥ずかしい・・・」

自分の匂いがわからない炭治郎は、相手にどんな香りを与えているのか見当がつかない。しかし、淫鬼や雄を惹きつけるということは、強力なフェロモンが作用しているのだろう。宇髓のおどけ気味だった視線が鋭さを帯び、雄のそれへと変わってゆくのを、炭治郎は見逃さなかった。

（この人はお客さんだ、俺の正体がわかっていながら指名してきたんだから、一生懸命奉仕しないと!）

元来真面目な性格の炭治郎は、自分からも進んで宇髓の唇にキスをする。

「可愛いねえ、たまんねえな。そんなにでっかい目エウるうるさせて・・・お前は何もしなくても、俺がリードするから、ただ抱かれておきな」

宇髓にそうは言われたが、自分も淫鬼喰らいの巫子として性技のあらゆる術を叩き込まれている。地位は「柱」だが、性術にかけては負けていられないと、炭治郎は競争心を奮い立たせた。が、宇髓に仕込まれた媚薬のせいで、肌に触れられるだけでため息が漏れる快感が流れ、自分から奉仕することを忘れてしまいそうになる。

宇髓の大きな掌が体中を這い回り、それだけで感極まってしまいそうだ。すでに色を濃くした桜色に指を掛けられた瞬間、炭治郎は甘い電流が流れるのを感じ、思わず声を上げてしまう。

「あっ・・・！」

それに気を良くした宇髓は、炭治郎に口づけをしながら両方の桜色を指で弄んできた。

（だ、だめ、口づけされながら触られたら、何も考えられなくなる・・・！）

しかも宇髓の指の技巧は、これまでの一般客など足下に及ばない巧みさで、炭治郎がそれは止めて欲しい、と懇願する快楽の流し方を心得ている。

「んっ、んん、んっ、んっ・・・！」

胸で果てそうになった直前で宇髓は愛撫を止め、再び炭治郎の体中に掌を這わせてゆく。

「はあ、はあ、はあ・・・」

すでに身体の淫熱が抑えられなくなってしまうている炭治郎は、宇髓にされるがまま身体を開く。

大きな舌で顔中を舐められてくすぐったかったが、それもまた快感に変換され、炭治郎は純粹に快楽を感じ始めていた。

一通り炭治郎の肌の感触を楽しむと、宇髓は少し離れてまじまじと炭治郎の裸体を眺め始めた。

「うーん・・・いいなあ」

媚薬で薄紅に仕上がり、欲情の汗を浮き上がらせている炭治郎の裸を見つめ、宇髄が顎に手を当てて満足した声で言う。

平素の炭治郎ならば恥じ入って「冗談を」と顔を覆ういじらしさを出すところだ。しかし今は宇髄に使われた媚薬が体中に回って、淫らな熱が炭治郎の官能をじりじりと焦がしていて、もっと触れて欲しくて堪らない思いに駆られている。

特に感じる性感帯の密集した部分が強く反応して、卑猥にも色を濃くし、刺激が欲しくて強く反応を示していた。

「あ・・・ふあ、そこ・・・」

放り出されていた胸の桜色に指をかけられ、しばらく時間を置かれてからの愛撫は、倍以上に快楽を強く感じる。

宇髄は左の桜色に舌を這わせ始めてきた。柔らかくぬめる熱い舌の感触が炭治郎の官能を刺激し、否応もなく絶頂へと上り詰めてゆく。

そんな状態で宇髄は空いた右手で炭治郎の両足の間に手を挿し込んだ。

「んんっ！んうっ・・・ちよ、ちよっと待ってくださ・・・」

宇髄は炭治郎の言葉には耳を貸すことなく、片手を使って雛先や種玉、秘孔にまで指を滑らせて来る。媚薬と宇髄の愛撫ですでに濡れきっているそこを弄られるのは恥ずかしい。

そういう仕事だというのに、炭治郎は相手の宇髄を客として見れなくなってしまっていることに気づいていなかった。

大きな大人の手で雛先をゆるゆると擦られ、涎が出そうな快感が腰へと走る。両足が勝手に痙攣して快楽を訴え、淫蜜がはしたなく量を増してしまう。

「おー、本当にケツが濡れるんだな。しかし、もうここはビショビショだな。挿れていいか？」

宇髄に露骨な身体の状態を指摘され、炭治郎は両腕を交差して顔を覆い、口を引き結んでいた。羞恥のために、宇髄の顔を見ることができない。

「おい、お前今は風俗嬢だろう？ちゃんとお客様に奉仕しないといけないんじゃないのか？」
笑交じりの宇髄の声に意地悪を感じたが、確かに炭治郎は身体を売る仕事の最中だ。

「ほら、ちよつと足開け・・・」

言わなくとも、宇髄は炭治郎の両ひざを捕まえて大きく左右に開かせる。淫鬼相手にこういう恰好を強要されても、羞恥よりも闘争心が勝って炭治郎の心は挫けないが、いざ一対一になり、超絶美形の宇髄と面と向かって対峙すると、自分の身体のはしたなさがいたたまれなくなってくる。

「ひやつ・・・」

炭治郎が小さく悲鳴を上げた。宇髄はいつの間にか手にしていたローションを炭治郎の両足の間へふんだんに垂らしてくる。

人肌に温まったそれはぬめる感触だけで違和感はないが、潤滑液が増えたことで摩擦がスムーズになり、炭治郎はさらに強い快感を与えられてしまう。

ぬるぬるのローションを塗された雛先を上から捏ね回され、ひどくぬるぬるする感触が言葉にならない程気持ちよく、炭治郎の胸は高鳴り、腰が勝手に跳ね上がってしまう。

「あ、ああ、だ、だめ、出る、出ます……！」

快感がどんどん蓄積し、炭治郎はぞくぞくと走る官能に耐えられず、宇髄の逞しい腕にしがみ付いて絶頂を訴えた。

「いいぜ？ 派手にイキな」

また笑いの混じった声で宇髄は言うのと、手の動きを速めて雛先を縦横無尽に撫で擦り、根元から先端までを激しく扱かれた直後、炭治郎は射精絶頂を迎えてしまった。

「んん——！！」

頭が白くなる瞬間の強烈な射精絶頂を迎えて、炭治郎は体中を強張らせながら達悦し、終わった直後に身体をぐたりと弛緩させた。

絶頂したばかりで力の抜けた炭治郎に、宇髄が身体中へキスの雨を降らせて来る。それが純粹に気持ち良くて、唇を舐められた時は再び頭の芯が痺れる快感が蘇ってきた。

「んっ、あ、い、今は触らないで、ください……だめ……ですっ」

射精したばかりの雛先を続けて弄ぶ宇髄の行動に、炭治郎は焦る。絶頂した直後は酷く敏感になり、風がそよいでも感じるほどののだ。それを大人の大きな手に包まれて撫で擦られては堪らない快感とやるせなさが込み上げてくる。

※

両腕を背後で組まされ、肘から手首の間を重ねられて黒い革ひもで縛られる。

胴体にはレースのビスチェに、足にはニーハイの網タイツを履かされ、ガーターベルトを着けられた。

しかし炭治郎が纏う衣服はこれだけで、恥ずべき部分は全て曝け出され、羞恥極まりない格好だ。

ビスチェは胸の下からヘソの上までの短さで、当然下半身は下着など履かされていない。

これならいっそ、裸の方がましだと思ふ姿に、炭治郎は歯噛みして恥ずかしさに耐える。

「ほら、まだ準備は終わってないわよ！両足を開かせなさい！」

すると二人の淫鬼がテーブルの上へうつ伏せに寝かされた炭治郎の両足を持ち上げると、背中を反らせる態勢にさせた。

息苦しい体勢だが、身体の柔らかい炭治郎には何も苦痛はない。呻き声一つ上げない炭治郎をつまらなさそうに見ながら、プラムは用意した器具を手を持った。

（これから何をされるんだ？んんっ・・・！）

すると炭治郎の秘孔にぬるりと何かが挿入された。おそらく指だろう。質感からして、グローブでも嵌めているらしい。

「うあっ・・・あ・・・ああ・・・」

「ふん、気持ちいいのね？全く真正の淫乱ね！淫乱にはふさわしいご褒美を与えてあげるわ？ほおら、ちゃんと受け止めなさい」

指が抜けたと安堵した直後、突然秘孔を無理矢理開かせて、男根のような異物が挿入される。

「ああっ！うああああっ！」

それは冷たく、歪曲もないただの棒のように感じた。炭治郎が声を上げるとプラムは薄笑い、さらに棒を奥へと挿入し続ける。

（ど、どこまで挿れるんだ、胎が・・・裂けるっ・・・！）

結腸近くまで辿り着くと、挿入物はようやくやぐ進みを止めた。すでに汗が身体に浮いている炭治郎の皮膚からは、薫る匂いが漂い始めている。それを嗅いだ低級の淫鬼たちは顔を上気させ、生唾を飲み込んだり、欲情の反応を露にし始めた。

「ふっ」

「！」

プラムが息を吹いたと思うと、胎内に風を感じ、炭治郎は戦慄した。ありえない場所への刺激に戸惑い、混乱しそうな頭をなんとか鎮めて、炭治郎は冷静に状況を測ろうとする。

（なんだ？挿入されたのはもしかして筒・・・？）

「ほら淫乱巫子。これからエサをくれてやるわ。あんたにはもったいないぐらいのオヤツだけれど、その分しっかり食べ尽くすのよ！」

炭治郎の耳に、波の音に似た音が聞こえたかと思うと、次いで筒が細かく振動する。

「ほおら、無惨様の陰気と興奮剤をミックスしたカプセルをたくさん挿れてあげるわ？普通の人間なら一粒で十日はオナニーがとまらない代物よ」

「なっ・・・なんだって・・・！」

快楽に耐性がある炭治郎だが、それほど強烈な、媚薬と言える陰気を胎へ流し込まれたことに、焦りを隠せなかった。

しかも、無惨の陰気は身体に取り込んで炭治郎の霊力に変換することができない。そのうえ、苦手とする薬物の類が混じっていると、効果は倍増しになってしまう。

「大きさも硬さも違うから時間差で溶けていくけれど、徐々に自我が快楽に奪われる恐怖をすっかり感じて怖がりなさい？」

そう言いながら、プラムは容赦なく次々とカプセルを筒の中に注いでくる。胎内で感じるわずかな振動から考えて、もう十粒以上は間違いなく挿れられている。しかし、カプセルが流される波に似た音は止まらない。

「くあっ・・・ああ、やめろっ・・・！」

プラムは小さく囁いながら、注ぐ手を止めない。

一体どれほど挿れられたのだろうか、ようやく背後から波音が無くなると、今度は筒に強い力が加えられる。

「ああっ！やめろ、抜くな、やめてくれ！」

「ふふ、結腸近くに50粒はくれてやったかしら？これだけの量を一度に摂取したら、いくら巫子でも廃人になっちゃうでしょうね」

「くっ……！」

筒をグリグリと捏ね回されながらの廃人宣言だが、炭治郎の身体は恐怖することより快楽を感じてを優先してしまう。筒の刺激で身体の体温が上がるとカプセルが溶けやすくなるというのに、感じやすい自分の身体をどうすることもできない。

「ほおら、カプセルがどんどん溶けていくわよ？興奮したら、余計に溶けるのが速くなるわよ？」

言われずとも、炭治郎は自分の身体を落ち着けるために深い息をして呼吸と整える。しかし、その様を見てプラムは嗤った。

「そんなことをしても無駄よ無駄！ほら、無惨様の陰気、たっぷり受け取りなさい！」

筒が激しく動いたかと思うと、そのまま一気に引き抜かれた。

「ああっ……！ふあ、あああああ……！」

長い引き抜きの快感に炭治郎が首を反って声を上げるが、遮蔽物を失ったカプセルは胎内の粘膜に直接触れてきて、炭治郎の胎に駐留する。

「んっ……うう、はあ、ああ、ああああ……」

まだカプセルが溶けていないのに、カプセルの薄い殻越しに伝わってくる無惨の陰気の気配だけで炭治郎の身体は欲情してしまう。炭治郎の身体の内にはもともと無惨の陰気が植え付けられていて、その核と呼応して身体がさらに昂るのだろう。

（だ、だめだ、これが溶けだしたら意識を保てなくなるかもしれない・・・なんとか、吐き出して）

「吐き出すなんて許さないわよ？これで栓をしてあげる」

炭治郎の思惑を見透かしたかのようにプラムは言い放ち、筒で柔らかくなった入り口にアナルプラグを挿入した。

「んぐっ！ん、うあつ・・・！」

入口へ常に異物が挟まった状態で、ゾクゾクと湧き上がるむず痒い快感が止まらなくなる。

「ふふ、あんたかわいーわねえ・・・見てると、どんどん酷くしてあげたくなっちゃうなあ。ねえ、これも巫子の魅惑の術なの？」

プラムが熱っぽい声で炭治郎の耳に囁き、その耳朶を舐める。

炭治郎の足を掲げていた二人の淫鬼が手を離し、炭治郎はテーブルの上に力なく身体を預けた。

淫靡な装いに、白い双丘の間へ黒いプラグが挟まっている様は、背徳感のある妖艶さがあり、淫鬼たちがそれを血走った目で眺めている。

「ほら、そんなガキに欲情してんじゃないわよ！とつと会場へ連れて行きなさい！」

プラムが喚き、淫鬼たちは弾かれたように我に返って、炭治郎を軽々と抱き上げると、そのまま部屋を移動した。

（カプセルが割れないようにしないと・・・呼吸を、整えて・・・）

炭治郎は自分の身体が愉悦に流されないよう、体温が低くなるよう操作し、カプセルの溶解を遅らせようとする。

自分がどこへ連れて行かれるのかもわからないが、拘束され、媚薬の爆弾を抱えさせられた今の状態では、決定的に脱出する方法もなかった。

目隠しをされて移動させられたが、着いたと思われた場所には、食事の匂いと香水の匂い、あと、幾人もの人間が群がっている臭いがある。

炭治郎の耳には、男たちが談笑する声まで微かに聞こえてきた。

そして上部が反った椅子に座らされると、両足を開かれて大開脚の体勢のまま足首を固定されてしまう。さながら、分娩台のような椅子に炭治郎は恥ずかしさを覚えたが、これからさらに羞恥が高まる展開が待っていた。

『さあみんな！お待ちかねのメインショーよ！』

プラムがマイク越しにそう叫ぶと、炭治郎へ一斉に目が眩むほどのスポットライトが当てられた。目隠し越しでもわかるほどの光量に、照らされたであろう自分の無様な姿が恥ずかしくなる。

「っ……！」

その直後、炭治郎は身体の異変を察知する。皮膚がジリジリと焼かれるような感触があったかと思うと、その部位がどんどん疼きだし、腰の奥が切なくなってくる。

（なんだこれっ……？呼吸が整えられない……！身体が、熱く……！っ、この光のせいかな？）

炭治郎の推測通り、この光には特殊な催淫効果があり、当てられれば性感神経が活発になる作用が含まれていた。

「はあー、はあー……あっ！ああ、あっ！ああああっ！」

腹の中でじゅわ・・・と燃え上がるような熱さを感じ、炭治郎は思わず悲鳴を上げた。カプセルが溶け始めたのだ。それと同時に体中の性感帯が敏感になり、空気が動いただけで感じるほどの感度になってしまう。溶けたカプセルはおそらくまだ一つだろう。これからどんどんカプセルが溶け、狂おしいほどの劣情が炭治郎を襲うことになるのだ。

（だ、だめだ、たったこれだけでこんなに、身体が・・・制御できない、熱い・・・！）

『今日の生贄ちゃんのはあの伝説と言われていた淫鬼喰らいの巫子！男の子だけれど、身体は淫鬼とセックスできるように淫乱に改造されちゃってるのよ？』

背後に人の気配が迫ったかと思うと、目隠しを取られた。

炭治郎の目の前には、スポットライトに照らし出された自分の身体と、その向こう、一段低いカーペットの床から、顔の上半分を仮面で覆ったスーツの男たちが一斉に自分へ視線を向けている光景があった。

（こ、こんな姿を大勢に見られるなんて・・・！）

衣服を纏っていてもこの格好をさせられて大勢に見られるのは恥ずかしい。それなのに、炭治郎はフェティッシュな格好をしているあげく、秘部をさらして、その中央に黒いアナルプラグまで挿し込まれている姿だ。

「おお、これはいい尻じゃないか。柔らかかそうで、歯を立てたら簡単に型がつきそうだね」

「なかなかの美脚だ。男の子と言ったかな？『胸がない女の子』でもとおるよ、これは」

「イチモツが見たことないほど綺麗だね。くすみがなくて、ピンクと肌色のグラデーション。同じ男とは思えないよ」

「乳首も綺麗な桃色だ。淫鬼喰らいの巫子、ということなら、使い倒されているんじゃないかね？」

「ふふ、そういう触れ込みで今夜は楽しみましょう、ということですよ。あの若い身体がドログチャにされるのを見るだけで、私は愉しめますね」

男たちの声が次々と炭治郎の耳に入ってくる。

（恥ずかしすぎる、嫌だ、この拘束、なんとか取れないのかっ……!）

無駄だと理解しても、炭治郎は両足に力を込めてなんとか拘束を引き千切ろうとする。しかし、足に力を入れたことで胎を締めてしまい、またカプセルが潰れる。

じゅわ、じゅわ、と連続で熱を感じ、直後、炭治郎は激しい欲情に襲われる。

「うぐっ……んん、んっ……!」

炭治郎の肌は汗まみれになり、巫子特有の、相手を誘う薫る香りを本格的に撒き散らし始めてしまった。

観覧席らしい場所にいる男たちにもその香りが伝わったらしく、ざわざわと騒ぎ立て、鼻を利かせている。

「これは良い香りだ。何の香水かな？」

「巫子は欲情すると薫ると聞いていますよ。もしかして、これが巫子の香り……?」

「嗅いだと、なんだか妙な気分になってくるな。淫鬼相手に用いられるなら、私たち人間には多少キツすぎるのでは・・・？」

『あらあら、匂いだけでもう興奮？まずはこの子の顔でもじっくり見てみようだい？』

炭治郎の周囲にはいつの間にか三脚が立てられていて、そこに鎮座されたカメラが炭治郎の顔を写す。カメラを通して観覧者側に備え付けられた複数の巨大モニターに、炭治郎の上氣した顔があらゆる角度で映し出された。

「おお、これは可愛らしい！」

「極上の美少年じゃないか！髪も、目も赤い！珍しい！」

「こんな純粹そうな顔立ちの子が淫鬼喰らいの巫子とは、にわかには信じがたいな」

「大きな目に柔らかそうな頬・・・見ているだけでたまらないな、これは」

「こんな可愛らしい子がこれから悶え狂うのかと思うと、考えただけで身体が熱くなるよ」

「本当に愛らしい・・・まだ15、6歳といったところか・・・」

炭治郎の顔を見た観覧者たちは、嗤い合って口々にその姿を称賛する。姿だけでなく、顔まで明々と晒され、炭治郎は恥ずかしさに目が眩みそうになる。

「ふふん、これからその化けの皮をはがしてやるから。しっかり無駄な抵抗をして励みなさい」
プラムがそう言って炭治郎の首に鈴のついた革の首輪を装着させた。

その瞬間、炭治郎は何故か既視感に襲われた。それは燃え上がるような官能の記憶で、自分を取り囲んで大勢の者たちが身体に触れてくるのだ。

(な、なんだこれはっ・・・！)

その感觸と共に、甲高い欲情にまみれた喘ぎ声が聞こえてくる。

(これは、俺・・・？)

既視感は一瞬で終わり、炭治郎はその原因を思い出すこともできず、ただ身体に淫熱の余韻が残るだけだった。

「んっ・・・ああ、あっあああっ！」

また胎の中でカプセルが溶ける。一粒で十日色狂いになる薬が、もう胎内で数粒溶けている。薬の効きは遅いらしく、炭治郎の身体は一気に燃え上がるということはないが、その効果は確実に、徐々に表層へ現れて来ていた。

(ああっ・・・身体が、どんどん熱く・・・冷やしないと、カプセルが溶けてしまうのに・・・) 口をわずかに開け、そこから、はあはあと荒い息を零しながら、炭治郎は自制しようと努力する。しかしそんな炭治郎の腐心などあざ笑うかのように、カプセルはどんどん溶けてゆく。

「んっ！んっ！んあああ・・・」

またじゅわあつと熱の広がる感觸が胎内で広がり、粒が弾けたのを感じ取った。もう五粒は溶けているに違いない。薬が回りきる前に残りをどうにかしなければ、炭治郎は快楽の奴隷になってしまう。

『コイツはね、真正正銘の淫鬼喰らいの巫子！匂いが普通の人間と違うってわかるでしょう？でもそれだけじゃないわよ？ほら！』

「あああっ！」

プラムは炭治郎の秘孔を塞いでいたアナルプラグを一気に引き抜いた。道具の大きさに拡張されていた秘孔だが、すぐに締まって元の慎ましい形に戻る。

そこへまたプラムがグローブを嵌めた指を秘孔に突き挿れ、秘孔の入口を素早く抜き差しする。

「んっ・・・あ、あああ・・・あっ、ああ・・・」

『これだけで気持ちいいらしいわよ？ほんと淫乱ね・・・さあ、これを見て？』

プラムが指を引き抜くと、秘孔と指に淫蜜の透明な糸が渡されていて、それがスポットライトの光に反射してより淫靡に演出する。

おお、と騒めく観覧者たちを無視して再び指を挿入し、今度はそのまま内壁をくすぐると、秘孔からトロトロと淫蜜が零れ落ち、美尻と椅子を濡らし始めた。

『みてみてー？この子、欲情すると愛液を出すのよ？男なのに、尻から！出すのよ！ほんととはしたないと思わなーい？』

炭治郎の濡れる様を見た男たちがどよめき、モニターには濡れている様と顔が同時に映し出される。

「あっう・・・あうっ・・・あ・・・ああっ・・・！」

指でコツコツと好いところを突かれ、とろけるような快感が止まらない。大勢に自分の醜態を見せているという事実は理解しているが、それよりも快楽が先に立ち、炭治郎は徐々に意識が混濁しかけ、淫欲が抑えられなくなりつつある。

「気持ち良さそうね。一回イッとか？そしたらカプセルがもつとたくさん潰れるわよ？」

プラムの囁きでカプセルのことを思い出し、炭治郎は多少の正気を取り戻した。

「うつ・・・あ、い、いい、しなくて、いい・・・！」

「大丈夫よ？私は上手だから。淫乱一人をイカせるなんて朝飯前よ」

プラムはグローブをしていない素手で炭治郎の肌を撫で上げる。それだけで妖しく甘い感覚が一気にせり上がり、炭治郎は堪え切れず熱い息を吐き出し、身体を小さく痙攣させた。

下腹から左胸を何度も往復して撫でられ、最後に左の桜色の突起を指先で抓まれる。

「んぐうつ・・・！」

ズン、と甘い快感が落とされ、すぐに絶頂間際まで昇りつめさせられて、炭治郎は焦りを感じた。

（こ、ここまで陰気が回っているのか？これ以上刺激を受けたら、意識が・・・）

すると、不意に左胸を打擲され、炭治郎の肌は引き攣った。

「いっ・・・！」

痛いはずなのにその奥に妖しい感覚があり、ジンジンとした痛みの痕跡から熱が生じて、炭治郎は顔を上気させる。

「ふん、癪に障る肌！あとで鞭打ちにして、ズタズタにしてやるわ」

一転してプラムが怒りの表情で凄み、炭治郎に鬼の視線を向ける。それに抗するほどの眼力は今の炭治郎では引き出すことができず、ただ俯くしかできなかった。

（悔しい・・・抗いたいけれど、動く薬の巡りが速くなる・・・！）

薬の効果が発揮されて来たのか、徐々に炭治郎の身体は熱を帯び、さらに薫る汗を滴らせて肌をほんのり赤らめている。性感神経もすでに針の先のように尖って、どんなわずかな刺激も快楽に変換されてし

まう。体中の快感を覚える部位が次々と騒めき立ち、達することができ性感帯は暴れ出したいほどに疼き始め、いよいよ忍耐が試されるようになってしまった。

(んんっ・・・これはきつい・・・耐えないと、身体を、制御・・・しないと・・・)

無惨の陰気を含んだ薬は炭治郎と拔群に相性が悪く、意思に反してどんどん身体が淫欲を深くしてしまう。

続きは製品版でお楽しみください。